

「地域の力」

心をつないだ

「消防団」が初動調査や本部⇨地域のパイプ役として活躍



地震発生直後、地域の消防団員はいち早く被害状況の調査や高齢者などの安否確認、避難所への誘導、警戒などに当たった。翌日以降も、崩落危険のある地域の警戒や崩落対策としてのビニールシート張り、対策本部との連絡調整などを行った。もちろん、彼らの家も被害に遭っている。家族もいる。自分の家を後回しにして「地域のために」と奔走した。これらの活動には、延べ約2,000人にのぼる消防団員が出動。彼らの活動は間違いなく地域の大きな力となった。「普段からともに活動している」という安心が住民にとっての精神的支えとなった。

「自治会・自主防災組織」が地域を牽引



1_避難所で会議する沖自治会の皆さん 2_炊き出しを行う大鷹沢地区の皆さん 3_地域の結束の強さを感じた

地震発生直後から、消防団とともに地域を支えたのが、地元自治会や自主防災組織だ。約430世帯が加入する沖自治会（高野次雄会長）は、地震直後に役員が手分けして各家庭を見回り、安否を確認した。そして、最大約250人いた福岡中学校の避難所で炊き出しを行ったほか、避難所支援のために班を編制し常駐した。同自治会は、平成22年6月に自主防災組織を結成したばかりだが、結成以前から炊き出しなどの訓練を行ったり、炊き出し用の大きな釜などを準備していたりした。まさに「備えが活きた」形となった。そのほかの自治会も同様に避難所や地区の住民たちを支えた。間違いなく地域の力となった。さらに、避難所となった各地区公民館や各小中学校の職員・先生たちも、誰にお願いされるでもなく支援に当たった。地域に暮らす人々が「地域のために」と尽くした。地域にはいろいろな職種の方が住んでいる。ある農家の方は米を準備し、ある建設業の方は自家用の発電機を避難所に提供した。これが「地域の底力」だった。



沖自治会長
たかの 高野 次雄さん

今回の地震を教訓に人と人のつながりをより大切に

自主防災会を発足して1年余りですがよくやった方だと思います。地域の誰がどういう設備を持っているかが普段の付き合いで分かっている。それを最大限利用させてもらいました。ただ、各避難所に発電機と燃料は必要だと感じました。また、組織的な役割を作っていても、全員が白石にいたとは限らない。役員任せではなく地域の住民みんなが同じ意識の中で動けるようにしていく必要があります。そのためにも、常日ごろの隣近所同士の付き合い、人と人のつながりが一番重要になってきます。そ

して、一人一人が準備しておくことです。今後、高齢者の方々の管理や防災マップを整備していくつもりですが、問題になるのが個人情報保護の壁。過剰すぎるというとき手遅れになる場合もあるので、災害時のための対応を検討する必要があります。津波はなくても、山崩れやセケソダムが決壊、噴火の可能性はゼロではありません。シミュレーションしておくことも大切です。今回の地震を教訓に地域がよりつながっていければと思います。ぜひ反省会を開いて今後に生かしていきたいと思っています。

全国から降り注いだ「支援の輪」



震災直後から、白石市には市内外を問わず多くの支援が届いている。企業や個人、自治体から「ヒト・モノ・カネ」すべての面で支援を得た。姉妹都市を結ぶ北海道登別市や神奈川県海老名市からは毎日のように物資が届いた。友好都市を結ぶ北海道札幌市白石区からは寄付金や小学生が書いた応援メッセージが届いた。遠くは福岡県や長崎県、熊本県の自治体からも下水道復旧の応援隊が白石を訪れた。白石戦国武将隊「奥州片倉組」の皆さんは、東京都の宮城ふるさとプラザで募金活動を行ってくれた。白石に限らず日本全国が、お金に代えられない「人の温かさ」に包まれた。

若い力が輝いた「災害ボランティア」



東北学院大学4年 しばた 柴田 しず香さん
白石工業高等学校3年 よしだ 吉田 翔一さん

同じ白石でも地域によって被害が違うと感じました。地震後、高齢者だけでは片付けなどはできない。少しでも役に立って良かったと思います。

3月18日、白石市社会福祉協議会は全国から訪れるボランティアに対応するため、「白石市災害ボランティアセンター」を設置。ボランティアの方々は、がれきの片付けや倒壊ブロックの整理、災害で出たごみなどの整理、室内外の整理・清掃などの作業に当たった。登録者数は290人。そのおよそ9割が高校生や大学生であった。彼らは「少しでも役に立ちたい」という思いを行動で示した。この動きはきっと、白石の未来につながっていくはずだ。

被災地 白石がより大きな被災地を支援

ライフラインが完全に復旧しない中、より被害が大きい自治体への支援に動いた。(財)白石青年会議所の皆さんが、全国の青年会議所から集まった支援物資を山元町や亶理町の避難所などへ数日にわたって運んだ。福島県南相馬市から原発事故のために避難した方々には、少しでも元気になってもらおうと奥州白石温麺協同組合から白石温麺が提供された。

非常事態に生まれた「絆」は、きっと一生のつながりとなっていくに違いない。



1_南三陸町に物資を搬送 2_白石青年会議所の皆さんが山元町を支援 3_福島県南相馬市からの避難者に白石温麺を提供（やまぶき亭）

「市内商店街・直売所」が活躍



▲城下広場で野菜などを販売したパーバ工愛市

食糧不足という非常事態で活躍したのが、市内の商店街や直売所などの小規模商店だ。品数こそ震災前よりも少ないものの、独自の流通を生かし懸命に店を開けた。スーパーやコンビニなども建物が被害に遭っている中、駐車場などを利用して食料や生活用品を販売した。「少しでも皆さんのもとへ提供したい」という思いが、店を開ける原動力となった。

支え合いを生み出した

「ヒューマンパワー」